

現役教師ですが  
“教育”について  
こんなことを考えてます。

—これからの教育を担う人たちへ—

受験生にとって聞けそうで、なかなか聞く機会がないのが現役教師の教育観。  
毎月1つのテーマを取り上げ、先生方の考えを聞いてみました！

今月のテーマ：国際理解

グローバル化が進む次世代の子どもたちにとって、国際理解は必要不可欠。中間先生は海外を旅した経験から、子どもたちに異文化理解の重要性を伝えようとしています。

著 中間 貴之

鹿児島県生まれ。平成21年、小学校教諭となる。現在、千葉県八千代市立西高津小学校教諭。

## 「え！？エジプト人は水を飲まない 人々なの？！」

40度を超える灼熱の中、バスに揺られていました。車内にはジリジリと焼き尽くすような日差しが照りつけています。

喉の渇きに耐えきれずしきりに水を飲む私を除き、乗客の誰ひとりとして、飲み物はおろか食べ物すら口にしません。ただ外を眺め、沈黙を保っていました。

## 海外を放浪する…

学生の時、単身でオーストラリアを1ヶ月間放浪した経験を機に、バックパック1つで色々な地に赴き、放浪するのが私の趣味となりました。

冒頭の1コマは、エジプトで体験したことです。イスラム教では、ラマダーンに日の出から日没までの間、断食を行います。私がエジプトを訪れたのもその時期でした。だから、人々は灼熱の中であっても飲食を断ち、日没が来るのを待っていたのです。

ところ変わってインドのヴァラナシ。ここにはインド中から最期を迎えた人々がやってきます。街中の狭い路地を歩けば、数人の男性が布に包まれた遺体を火葬場に運ぶ光景を度々目にするでしょう。川沿いでは、遺体を燃やす煙が絶えず立ち込め、そうして焼かれた灰はガンジス川へと流れていきます。その傍らでは、人々が沐浴を行ったり、洗濯をしたりと何気ない日常生活を送っているのです。

以上のような経験は日本の中では、なかなか味わうことができません。これまで抱いていた宗教観や死への概念を覆す程の出来事に触れた時、感性が大きく揺さぶられます。これこそが海外を旅する醍醐味なのだと私は思います。

## 異文化は「汚い」？「変だ」？

さて、私は旅で経験したことを学級の子どもによく話します。スリランカの旅行記を話している時のことでしたが、現地では、食事の際はスプーンや箸を使わず手で食べます。このことを伝えると、「汚い」「変だ」と子どもたちから驚きの声が上がりました。

もちろん奨励されるべき言動ではないのですが、これは子どもたちの感覚からすれば、至極当然の反応なのでしょう。日本の民族、文化の中で生活していると、他民族、他文化に触れる機会が少ないです。日本で生まれ育った彼らは、国内の経験しか尺度として持ち合わせておらず、異なる文化を異様と思うのです。

私は、グローバル化が進展する次代を担う子どもたちにとって、多様な価値観を知り知見を広げることには大変有意義であると考えています。また、異なる価値観を拒絶するのではなく、受容できる資質を養うことも非常に重要であると捉えています。

他文化の多様性を容認し、異文化間の相互理解を図ることこそが、国際理解を深めていく上で大切なことです。「多面的な視点で物事を捉える意識を大切にしてほしい」と、私は常に子どもたちに説いています。

## 違和感を覚えた大坂選手への質問

しかし、日本社会は多様な価値観を柔軟に受容できる社会といえるのでしょうか。2018年、テニスの全米オープンで大坂なおみ選手が優勝しました。日本へ帰国し行われた優勝会見で、日本の記者から大坂選手に向けて奇妙な質問がありました。それは「大坂選手が、自身のアイデンティティをどう捉えているか」というものです。彼女の容姿や母語、生い立ちが、そのような質問をさせたのかもしれませんが。彼女は困惑した表情を浮かべながら「私は私。」と答えました。

私はこの質問に違和感を覚えます。一個人のアイデンティティを取り上げ、言及することに、果たして何の意味があるのか。

多様性が叫ばれる昨今。国籍や容姿に固執することなく、あくまで個人を尊重する社会が求められていると私は強く考えています。

### 今月のまとめ

- グローバル化が進展する次代を担う子どもたちにとって、他国の多様な価値観を知り、知見を広げることには大変有意義である。
- 国際理解といっても、目の前の人を理解し、心と心を通わせることの積み重ねである。

## “心”の距離を縮めて国際理解を深める

近年の航空技術や情報技術の進歩により、世界中の人と人の距離は格段に近くなりました。これからの国際社会に求められるもの、それは“心”の距離でしょう。

民族、文化、宗教等の違いも見方によれば、一人一人の違いに過ぎません。“国際理解”と言えば大層な事柄のように感じられますが、つまりは目の前にいる人を理解し、心と心を通わせるという小さな事象の積み重ねなのです。先月号で池田先生も言われていましたが、人と接することは新たな知見に出会うことにつながります。自己の価値観に囚われず、寛大な心をもって相手との“心”の距離を縮められた時、国際理解はさらに深まっていくことでしょう。

## 異国の地で子どもたち同士の交流を促したい

最後に、私には夢があります。それは異国の地で教鞭をとり、日本と海外の子どもたちとの交流を促進することです。私が海外事情を話しても、所詮は私というフィルターを通してしか伝えられません。子どもたちの国際理解を深めるには、直接、子どもたち同士が交流を図ることが最善なのです。

海外に住む現地の子どもと日本の子ども同士が、手紙やテレビ電話を介して交流すれば、互いの言語や文化の違いを切に感じるができるでしょう。そして、それらを理解するために、目的意識を持って外国語を学んだり歴史に興味を抱いたりするかもしれないのです。

こういった経験を通して、子どもたちは国際的な視野をより広く持つことができます。私は海外と日本との生きた交流を促進し、国際理解を深めていきたいと考えています。あなたなら、教員として国際理解をどのように考えるでしょうか。